〈講演〉

# 展覧会「明治の子どもたち一版画にみる遊びと教育」および講演会報告

# 牧野 由理 · 山口真理子

## 【要旨】

本稿は、平成 25 年 11 月から 12 月にかけて城西国際大学水田美術館で開催した展覧会「明治の子どもたち―版画にみる遊びと教育」と、その関連企画として行った講演会「明治の幼稚園―掛図・教具からみた図画教育―」の内容を報告するものである。展覧会では子どもが描かれた明治期の木版画から、当時の教育や遊び、風俗を紹介した。講演会では明治期に創設された幼稚園や図画教育の様子について、調査報告も兼ねて説明した。この展覧会・講演会は、維新前から続くものや新しく導入された教育や風俗など、明治期の子どもを取り巻く文化を、本学学生をはじめ、学外の来館者、聴講者に、視覚的にわかりやすく紹介する機会となったと考える。

キーワード:明治時代、木版画、教育、遊び、幼稚園

# 1. はじめに

平成25年11月12日から12月7日にかけて、城西国際大学水田美術館において展覧会「明治の子どもたち―版画にみる遊びと教育」を開催した(図1)。福祉総合学部子ども福祉コースをもつ大学の美術館として、平成21年には展覧会「浮世絵に見る子どもの情景」を行っており、今回は子ども絵シリーズの第2弾にあたる。本展は明治期の子どもを描いた木版画を通し、当時の教育や遊びなどを紹介することを目的とした。そして、展覧会の関連企画として、12月6日に牧野による講演会「明治の幼稚園―掛図・教具からみた図画教育―」を開催した。本稿はこの展覧会と講演会の内容を報告するものであり、山口が第2章、牧野が第3章を執筆した。



図1 展覧会チラシ、制作=本学メディア学部 メディア情報学科3年 柘植はる香

# 2. 展覧会「明治の子どもたち―版画にみる遊びと教育」について

江戸時代の浮世絵には、子どもが五節句などの年中行事を楽しむ様子や、水遊びや凧揚げといった遊びに熱中する姿を描いた「子ども絵」と呼ばれる分野がある。子ども絵の流れは明治時代へと続き、浮世絵の伝統を引く木版画や新たな印刷技術の石版画においても、子どもを主題とする作品が数多く作られた。本展では、遊んだり学んだり、和装や洋装の様々な姿の子どもたちが描かれた明治期の木版画を展観した(表 1)。本章では展示構成に従って数点の作品を取り上げながら、当時の教育や遊び、服装や髪型といった風俗を紹介していく。

表 1. 「明治の子どもたち 版画にみる遊びと教育」出品目録

No.	作品名	作者	制作年	判型·技法	版元	所蔵先
1	児学教導単語之図 第一単語図	肉亭夏良	明治7年(1874)	大判錦絵	辻岡屋文助	当館
2	第二連語図	文部省	明治7年(1874)	木版多色摺		玉川大学教育博物館
3	小学体操図解	井上探景(安治)	明治19年(1886)	大判錦絵	三宅半四郎	玉川大学教育博物館
4	新板器械体操之図	歌川国利	明治(1868~1912) 中期	大判錦絵	大倉四郎兵衛	玉川大学教育博物館
5	童蒙教育幻灯会	無款	明治28年(1895)	大判錦絵	深瀬亀治郎	玉川大学教育博物館
6	幼稚園教育遊双六	小国政 (五代歌川国政か)	明治25年(1892)	木版多色摺	福田熊次郎	玉川大学教育博物館
7	男子教育出世双六	楊斎延一	明治(1868~1912) 後期	木版多色摺	未詳	玉川大学教育博物館
8	幼女礼式教育之図	楊洲周延	明治23年(1890)	大判錦絵三枚続	林吉蔵	玉川大学教育博物館
9	若君お庭の遊	豊原国周	明治25年(1892)	大判錦絵	松井栄吉	当館
10	子供あそひ 馬のり	山本昇雲	明治39年(1906)	大判錦絵	松木平吉	太田記念美術館
11	子供あそひ 雪戦	山本昇雲	明治39年(1906)	大判錦絵	松木平吉	太田記念美術館
12	幼稚遊ひふねの諠争	小国政 (五代歌川国政か)	明治27年(1894)	大判錦絵三枚続	長谷川園吉	当館
13	小供風俗 瓢覃ぼつくり	宮川春汀	明治29年(1896)	大判錦絵	秋山武右衛門	当館
14	小供風俗 盲鬼	宮川春汀	明治29年(1896)	大判錦絵	秋山武右衛門	当館
15	小供風俗 千手観音	宮川春汀	明治29年(1896)	大判錦絵	秋山武右衛門	当館
16	小供風俗 やり羽子	宮川春汀	明治29年(1896)	大判錦絵	秋山武右衛門	当館
17	小供風俗 子とり姥	宮川春汀	明治29年(1896)	大判錦絵	秋山武右衛門	当館
18	小供風俗 淀の川瀬	宮川春汀	明治29年(1896)	大判錦絵	秋山武右衛門	当館
19	小供風俗 地獄極楽	宮川春汀	明治29年(1896)	大判錦絵	秋山武右衛門	当館
20	小供風俗 まゝごと	宮川春汀	明治29年(1896)	大判錦絵	秋山武右衛門	当館
21	小供風俗 十六むさし	宮川春汀	明治31年(1898)	大判錦絵	秋山武右衛門	当館
22	小供風俗 阿ねさま	宮川春汀	明治29年(1896)	大判錦絵	秋山武右衛門	当館
23	姉様衣せうつけ	無款	明治21年(1888)	大判錦絵	松野米次(治)郎	当館
24	子供遊ひ おもちやの勝負	山本昇雲	明治39年(1906)	大判錦絵	松木平吉	太田記念美術館
25	幼稚苑 おてたま	楊洲周延	明治38年(1905)	大判錦絵	松木平吉	当館
26	今様の美人	楊洲周延	明治28年(1895)頃	大判錦絵三枚続	未詳	当館
27	少女遊戯すごろく	榊原蕉園画 巌谷小波案	明治43年(1910)	カラー印刷	博文館	当館
28	子供あそひ お庭	山本昇雲	明治39年(1906)	大判錦絵	松木平吉	太田記念美術館
29	幼稚苑 わんわん	楊洲周延	明治38年(1905)	大判錦絵	松木平吉	当館
30	小供風俗 動物園	宮川春汀	明治29年(1886)頃	大判錦絵	秋山武右衛門	当館
31	東風俗福つくし ふくろ	楊洲周延	明治22年(1889)頃	大判錦絵	武川卯之吉	当館
32	夢中うなされるこども	豊原国周	明治25年(1892)	大判錦絵	松井栄吉	当館
33	魚市場の子	豊原国周	明治25年(1892)	大判錦絵	松井栄吉	当館
34	小供風俗 汐干がり	宮川春汀	明治29年(1896)	大判錦絵	秋山武右衛門	当館

## 2. 1 教育

欧米を手本に近代国家づくりが進められた明治時代、子どもの暮らしにも大きな変化があった。明治5年(1872)発布の学制は、「一般ノ人民、華士族卒農工商及婦女子、必ズ邑ニ不学ノ戸ナク、家ニ不学ノ人ナカラシメン」と宣言し、四民平等、男子も女子もみな学校へ行くことを定め、これより全国の町や村に小学校が開設される。家業や子守に従事する子も多く、授業料も有償だったこともあり、当初の実質就学率は30%台と低かったが、義務教育年限の短縮や授業料廃止などによって、明治末には実質就学率は90%を超えた¹。校舎は木造の洋風建築で作られた場所もあるが、はじめは寺や民家を教室として利用する場合が多かった²。

## 2.1.1 掛図

生徒の進度によって個別指導した寺小 屋とは異なり、授業は欧米に倣って学級 編成による一斉教授法が導入された。肉 享夏良の《児学教導単語之図 第一単語 図》(明治7年・1874、図2)は、教室で 先生が掛図を指し、生徒たちが声を出し て読み上げる授業の様子が描かれている。 掛図とは、黒板や壁に掲げる大きな絵図 や表で、アメリカのチャートを参考に作 られた視覚教材である3。日本では明治6 年(1873)に東京師範学校で初めて製作 され、同年5月以降、文部省が改版した 「五十音図」、「数字図」、「乗算九九図」、 「単語図」など三十種の掛図が全国に普 及した。本図に描かれた掛図は、始めか 終わりが「い」と「え」の単語を図示し たもので、例えば、「糸」には「蚕または 綿にて製す」(原文ひらがな)という簡単 な説明文も付されている。文部省の掛図

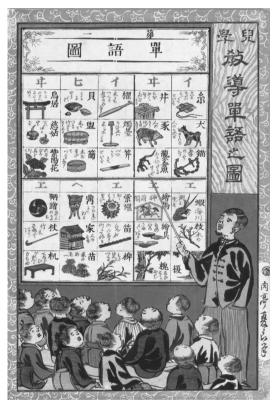


図 2 肉亭夏良《児学教導単語之図 第一単語図》 当館蔵

は約 $80\times60$  cmほどの大きさであり、本図は実際のものより巨大に表されているが、文部省の掛図《第一単語図》とほとんど同じ内容である $^4$ 。この肉亭夏良のシリーズはおもちゃ絵(子ども向けの浮世絵)であり、《第八単語図》まで刊行された。これらは家庭での学習に用いられたと思われる。

そして、実際に使われていた文部省の掛図《第二連語図》(明治7年・1874)も展示した。

連語図は単語から短文を作る練習をする教材で、例えば、「学校」「書物」「手習」という単語から「学校に出てゝは書物を読み又手習すべし」という短文が示され、教室で学習する生徒の図が表されている。当時、教科書は高価で比較的裕福な子どもしか買えなかったため、明治10年代までは掛図が主要な教材だった。

## 2.1.2 体操

学校教育における体操も明治6年(1873)より始まった。当初は勉学の妨げになるストレスの発散や健康を保つことを目的としたが、明治11年(1878)に文部省に招聘されたアメリカの体育教師リーランド(Leland G.A)によって大きく発展する。さらに文部大臣・森有礼の教育改革により、明治19年(1886)、尋常小学校では遊戯と軽体操、高等小学校では兵式体操が必須科目となった5。井上探景(安治、1864~89)の《小学体操図解》(明治19年・1886、図3)には、アメリカからもたらされた球竿(きゅうかん)や亜鈴(あれい)といった木製器具を手にもち軽体操をする、和装や洋装の生徒たちが描かれている。本図もおもちゃ絵であり、子どもたちは人物を切り取って遊ぶこともあったと思われる。

歌川国利(1847~99)の《新板器械体操之図》(明 治中期)は、男子生徒たちが棒高跳び、木馬、平行



図 3 井上探景《小学体操図解》 玉川大学教育博物館蔵

棒、ブランコ、吊り輪、回転塔、鉄棒などの器械体操に取り組んでいる図である。富国強兵が掲げられたこの時代、体操は体力を増進させるとともに、集団行動における規律性を高めるのに有効とされた。なお、運動会が始まったのも明治時代で、全国の小学校へは明治 20 年(1887)前後に普及した。

## 2. 1. 3 幻灯

幻灯とはガラス板や写真板のスライドに石油ランプの光を当て、レンズを通し画像を拡大投映する器械である。幻灯は明治 13 年 (1880) に各府県の師範学校に頒布され、20 年過ぎから全国的に普及し、幻灯会が大流行する<sup>6</sup>。題材を地理・歴史・道徳などにとり、文明開化のための新知識を啓蒙する役割を担った。映し出される色鮮やかな画面を子どもたちは夢中になって眺めたことだろう。

《童蒙教育幻灯会》 (明治 28 年・1895) には、上部にスクリーンを指し解説する弁士と オルガンの伴奏者が描かれ、下部に外国風景や浅草観音などの名所、楠木正成などの歴史 上の人物といったスライド一覧が付いている。 なかには終幕を知らせるスライドの定番だっ た幾何学的意匠の花輪車も見られる。本図も おもちゃ絵であり、スライドを切り離し、ス クリーンの円をくり抜いたところに当てて遊 べる仕様になっている。

# 2. 1. 4 幼稚園

明治9年(1876)に東京女子師範学校(現 お茶の水女子大学)の付属として、日本初の 幼稚園が誕生した。通園できたのは裕福な家 庭の子どもであったが、制度化されて全国に 徐々に普及し、明治45年(1912)には公立私 立合わせて533 園の幼稚園ができた<sup>7</sup>。

小国政(五代歌川国政か)の《幼稚園教育遊双六》(明治 25 年・1892、図 4)は、「幼稚園卒業」を上がりとする、幼児の日常をとりあげた双六である。様々な遊びとともに、入園、通学をはじめ、指教、単語之図、教練など幼稚園での教育が描かれ、他に帰宅の礼といった家庭でのしつけの図も含まれている。幼稚園について詳しくは、第3章の牧野氏の論考を参照いただきたい。

# 2. 1. 5 立身出世、女礼式

封建制度が崩壊したこの時代、福沢諭吉が『学問のすゝめ』で学問による立身出世を説くように、男子は身分にかかわらず勉学に励めば出世できると信じられた。楊斎延一(1872~1944)の《男子教育出世双六》(明治〈1868~1912〉後期、図5)は、男子の立身出世の王道を題材にした双六である。振り出しの「男子出産」から始まり、各マスには「幼稚園」や「学校入門」「大運動会」「卒業」「学論」「演説」などがあり、上がりは「国会議事堂」すなわち、

# 



図4 小国政《幼稚園教育遊双六》 玉川大学教育博物館蔵



図 5 楊斎延一《男子教育出世双六》 玉川大学教育博物館蔵

議員になって終わっている。各マスの本の意匠枠の中には、図の解説の他、「洋行」に「よき事をわが国へ伝え伝習すべし」とあるように、国のために役立つ人材になるよう訓示が書かれている。子どもたちはこのような双六で遊びながら、勉学に励み、官職につき高い社会的地位を得ることが理想的な人生であるとすり込まれたのだろう。

一方、女子は将来、夫を支え、立派な子どもを生み育てる良妻賢母になることが望まれた。そのために、衣食住や起居、来客の接遇、学校生活、儀礼行事、芸事などの女礼式と称する女性が心得るべき礼儀教育がおこなわれた。楊洲周延(1838~1912)の《幼女礼式教育之図》(明治23年・1890)には、女児が食事作法、茶と菓子の供し方、頂き方、挨拶の仕方を学ぶ様子が描かれている。江戸時代にすでに女子教育に関する書物は刊行されていたが、さらに明治期にはこのような女礼式を絵解きした浮世絵や双六などが多数つくられた。

# 2.2 遊び

明治期、子どもの遊びを題材にした木版画は数多く刊行され、屋内・屋外、男子・女子または両者共通、新旧のものなど、当時の多様な遊びを知ることができる<sup>8</sup>。

宮川春汀 (1873~1914) の《小供風俗》(明治 29~30 年・1896~97) は、習い事や日常の遊び、四季折々の遊び、行事を楽しむ子どもたちが描かれた、各 24 枚揃の 2 組からなるシリーズである。江戸の浮世絵を継承しながら、淡い色調と柔らかな筆づかいで子どもの風俗が優美に表され、強烈な色彩の明治期の浮世絵と一線を画す雰囲気をもつ。一枚摺が好評だったため、太田玉茗の序文をつけ、24 枚ずつ折本に仕立てた画帖 2 冊も刊行された。

このうち《小供風俗 瓢箪ぼつくり》には、「瓢箪ぼっくり」または「芋虫ころころ」とも

呼ばれる伝統的な遊びをする少女たちが描かれている。遊び方は、一列にしゃがんで前の子の帯の結び目をつかみ、「芋虫ころころ、瓢箪ぼっくりこ」と歌いながら、体を左右に振ってよちよちと進む。少し進んだ後、先頭の子が立ち上がって一番後方の子に「後の後の千太郎」と叫ぶと、後方の子が「何の用でござる」と立ち、いくつかの決まり文句を掛け合った後、後方の子が先頭になり、先頭だった子は後方へ行き、再び「芋虫ころころ…」と前進と掛け合いを繰り返す。年長の子が幼い子の面倒を見る子守の役割も兼ね、列の前後に年長の子、中間に幼い子が連なったという。

《小供風俗 千手観音》(図 6) も子守を兼ねた遊び が描かれている。千手観音像を入れた厨子を背負って お布施を乞いながら市中を徘徊する門付の姿を真似た 遊びで、年長の子が幼児を背中合わせに背負い、「千手



図 6 宮川春汀《小供風俗 千手観音》 当館蔵

観音、拝んでおくれ」と言いながら歩く。これら子守を兼ねた遊びは、弟妹や近所の幼児の 面倒を見るのが年長の子の務めだった時代ならではのものといえるだろう。

《小供風俗 子とり姥》では、少女たちが「子とろ子とろ」に興じている。この遊びは、平安時代に恵心僧都(源信)が子どもを集め、仏典の一場面を舞わせて奉納したことに始まるという。地獄の衆生や罪人を救い出そうとする地蔵菩薩に対し、獄卒(鬼)が「取るべし、取るべし、比丘比丘尼、優婆塞、優婆夷」と唱和しながら罪人を奪い返そうとする様子が遊びとなり、江戸後期には「比比丘女(ひふくめ)」や「こまどり」などとも呼ばれた。ルールは、親の後ろに一列に連なった子を、鬼が「子とろ子とろ」と歌いながら捕まえようとするのに対し、親は手を広げて子を守る。背後に回り込もうとする鬼の動きに列が乱れて、最後の子が捕まると鬼と交替となり、次に鬼は親となる。

《小供風俗 阿ねさま》では、少女たちが頭と胴だけの簡素な人形に千代紙の着物を巻いて姉様人形を作り遊んでいる。年長の子が机に向かって、年少の子のために人形の顔を描いている微笑ましい光景である。併せて、おもちゃ絵の《姉様衣せうつけ》(明治21年・1888、図7)を展示した。切って表裏を貼り合わせた肌襦袢姿の人形に、振袖や頭巾などを着せ替えて遊ぶおもちゃ絵である。展示室に切り取った本図の複製品を置き、来館者が手に取って遊べるコーナーを設けた。

また、伝統的な遊びや行事を楽しむ男子を描いた作品として、山本昇雲(1870~1965)の《子どもあそび》(図 9)を展示した。明治 39 年(1906)に刊行された 12 枚からなるシリーズで、笑ったり驚いたりする子どもの自然な表情、生き生きとした仕草が、優れた木版技術によって表現されている。昇雲は『風俗画報』(明治 22 年~大正 5 年・1889~1916、東陽



図7 《姉様衣せうつけ》当館蔵

堂発行)の表紙や挿絵を担当する一方、文展、帝展に日本画を出品し、美人や子どもを描いた木版画も高い評価を受けた画家である。

このうち《子供あそひ 馬のり》は、幼児とお馬さんごっこする少年、狛犬に馬乗りする 少年、竹馬で遊ぶ少年たちと、馬のつく遊びを集めた「尽くし」の趣向である。赤く染まる 紅葉や高台から見下ろす町並みが、場面に情趣を添えている。

《子供あそひ 雪戦》は、寒さをものともせず雪合戦に熱くなる少年たちが描かれている。 学生帽のチームと頬被りのチームが対戦し、両者はほとんど喧嘩の様相である。後方には旭 日旗を掲げる子がいて、日本軍と敵軍に分かれた戦争ごっこになっているのかもしれない。 さらに遠方にも二手に分かれたシルエットが見え、大規模な雪合戦が繰り広げられている。

《子供遊ひ おもちやの勝負》では、少年たちが紙相撲に夢中になっている。後ろで猫が 障子を破って入ろうとしていることにも気付いていないようである。行燈によるほのかな光 と影が、巧みな摺りの技術によって見事に表現されている。

以上のような江戸時代から続く遊びが行なわれる一方、日清戦争の戦勝の知らせに日本国 民が熱狂する中、子どもたちの間では兵隊ごっこや戦争ごっこが大流行した。小国政の《幼 稚遊ひ ふねの諠争》(明治 27 年・1894、図 8)には、海軍の格好をして船のおもちゃで遊 ぶ子、ラッパを吹き、旭日旗を掲げ、おもちゃの銃を持って陸軍の格好で隊列を組む子たち が描かれる。中国風俗の子の船を、刀を振り上げる子が踏み壊そうとしていることから、明

治27年7月に始まった日清戦争を暗示したものだろう。戦争ごっこを通して、子どもにも敵国人に対する蔑視感が自然と浸透していった。左端の女子は赤十字の腕章を付けており、日本赤十字社の従軍看護婦を示すと思われる。当時、実際に女子も看護婦役として戦争ごっこに参加していた<sup>10</sup>。



図8 小国政《幼稚遊ひ ふねの諠争》当館蔵

#### 2.3 風俗

最後に子どもの髪型や服装に注目する。子どもの洋服は晴れ着や外出着として、明治初期には上級階級に限られていたが、明治30年代後半から庶民の間でも着用されるようになった<sup>11</sup>。ただし、日常の暮らしでは和装であり、男子・女子ともに木綿の絣の着物に三尺帯を締めていた。男子は袴をつけない着流し姿で、都会では小倉織の縞の袴に下駄や草履、または靴を履く子もいた<sup>12</sup>。例えば、周延の《東風俗福つくし ふくろ》(明治22年・1889頃)に描かれた男子は、格子の着物に黒い羽織を重ね、房飾り付きのベレー帽をかぶり、革靴を履いた和洋折衷の装いである。

春汀の《小供風俗 動物園》には左から、和服に飾り付きたたみ帽子、ツーピース、セーラー服、羽織と袴に体操帽といった少年たちや、ワンピース姿の少女が描かれ、洋装が子どもに普及し始めた時期の様々なファッションが見られる。動物園は日本では明治 15 年(1882)に上野恩賜公園内に開園したのが始まりで、この時代に誕生した新しい遊楽地であった。

周延の《幼稚苑 わんわん》(明治 38 年・1905、図 1 の下部図版)の男児もセーラー服姿である。子どものセーラー服は、イギリス海軍の制服を着た 5 歳のエドワード王子(後のエドワード 7 世)を画家ヴィンターハルターが描いたことが評判となり、1840 年代に男子の服と

して世界的に流行した<sup>13</sup>。日本には、洋行帰りの人たちが持ち帰り、後に洋装店が作るようになったが高価だったという。なお、女子の学生服となったのは大正時代以降である。

昇雲の《子供あそひ お庭》(図 9)では、 朝顔が咲く夏の庭先で、魚や千鳥文様の浴衣 姿の少年たちが亀や蟹で遊んでいる。右の子 が被る麦わら帽子(カンカン帽)は、明治 5 年(1872)に横浜の町役人だった河田谷五郎 が外国人の真似をして作ったのが始まりで、



図9 山本昇雲《子供あそひ お庭》 太田記念美術館蔵

明治 20 年代に婦人帽として流行し、日清戦争後に一般に普及した $^{14}$ 。中央の子は白いエプロンを着けているが、明治末頃から、男女児の和服の上にエプロンを着用させる装いが流行した $^{15}$ 。

髪型については、維新後の成人男性の断髪令にともない、男子は五分刈り(図 1)が主流となる。女子は頭上にメガネ状の輪髷をつくる稚児髷や、お煙草盆、桃割れ、唐人髷(図 6 の右の子)といった江戸から続く髪型が結われた。また、大人の流行にならい、下げ髪にリボン(図 6 の左の子)やマーガレイトといった洋風の髪型をする女子もいた<sup>16</sup>。幼児は、頭上中央だけに髪を残して剃る芥子(図 9 の左の子)や、後頭部と耳の上の髪だけ残す盆のくぼといった髪型が江戸時代から続いていた。

以上、明治期の子ども絵をとおして、教育、遊び、風俗を紹介してきた。維新後、人々の暮らしは急激に変わったわけではなく、子どもの遊びや風俗は江戸から続くものが依然として多かった。一方、近代化政策のもと導入された学校教育や洋装などの新しい文化、富国強兵の流れを受けた戦争ごっこが、いち早く版画に反映されていた。これら版画に描かれた子どもの姿は脚色されたものだが、近代の子ども史を考察する上で有効な資料といえるだろう。

# 3. 講演会「明治の幼稚園―掛図・教具からみた図画教育―」について

展覧会「明治の子どもたち―版画にみる遊びと教育」では、関連企画として「明治幼稚園―掛図・教具からみた図画教育―」と題した講演会を開催した。展覧会では、明治期にはじめて開設された幼稚園の様子が描かれた木版画も展示されており、当時の人々の幼稚園への関心の高さがうかがえる。そこで講演会では展示作品を提示しつつ、幼稚園の設立の経緯や図画教育の様子を紹介した。また筆者が取り組んでいる日本各地に現存する図画教材に関する調査報告を行った。本稿は講演内容の一部を抜粋し、加筆したものである。

## 3.1 幼稚園の誕生

明治になると外国人の渡来や外来思想の影響によって、幼児のための教育施設が現れはじめる。明治4年(1871)にはメリー・プライン、ジュリア・クロスビー、ルイス・ピアソンの三人の宣教師によって横浜に「亜米利加婦人教授所」The Woman's Union Home が開かれる<sup>17</sup>。明治5年(1872)に「学制」が発布されるが、幼稚園は小学校の一種とみなされることとなる。「学制第二十一章」「学制第二十一章」の中に「幼稚小学」という言葉があらわれ、第二十二章に「幼稚小学ハ男女ノ子弟六歳迄ノモノ小学二入ル前ノ端緒ヲ教ルナリ」とある。この規定が日本において教育法の中に幼児教育機関の名称が掲載された最初のものとなる<sup>18</sup>。明治8年(1875)には京都市内と京都府下に「幼稺遊嬉場」と「幼稺園」が設立され、幼児のための公立の施設がつくられる。これらの施設がフレーベルのキンダーガルテン(Kindergarten)に影響されたものであることは幼稺園遊嬉場概則<sup>19</sup>からもうかがえる。

ドイツの教育学者であり幼稚園の創設者でもある Fr.フレーベル(Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782~1852)は幼稚園児童の遊具として 1837 年に恩物を製作した。恩物とは Gabe

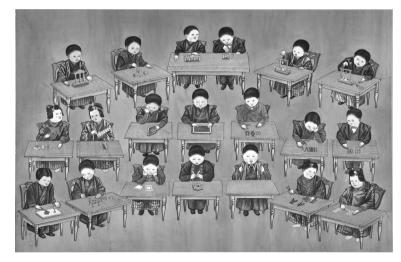


図 10 《二十遊嬉之図》お茶の水女子大学蔵

明治9年(1876)に日本で初めての公的幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園が設立された。本展覧会で展示された木版画から当時の幼稚園の一端をうかがうことができる。楊斎延一の《男子教育出世双六》(明治〈1868~1912〉後期、図5)は、明治期の上流階級の男子の立身出世図が描かれている。右下の「男子出産」からはじまり、あがりは「国会議事堂」である。「男子出産」の次は「幼知園」(原文ママ)、「学校入門」へと続いており、幼稚園が立身出世には不可欠な教育機関となっていたことが示されている。また小国政(五代歌川国政か)による《幼稚園教育遊双六》(明治25年・1892、図4)では、左下の「幼稚園通學」に女中に手を引かれて通園する女児の様子が描かれている。これらより、当時の幼稚園は一部の裕福な家庭の子女のための教育機関であったことがわかる。

## 3.2 《幼稚保育之図》にみる「図画」の様子

東京女子師範学校附属幼稚園の保育の実際については武村 耕靄による《幼稚保育之図》(図 11) よりうかがい知ること ができる。

武村耕靄 (1852~1915) は東京女子師範学校で絵画と英語を担当する教員であった。養子の武村忠の編なる『耕靄集 下』 <sup>20</sup>によれば、耕靄は本名を千佐子といい、仙台藩士武村仁佐衛門の長女として嘉永5年 (1852)、仙台藩邸で生まれた。母は耕靄が6歳の時に亡くなったが、8、9歳ころから狩野探逸、狩野一信、山本琴谷、春木南溟について日本画を学んでいる。その技術を生かして輸出用の扇面などを描いたという。明治6、7年 (1873、74) 頃、横浜共立女学校で英語を学び、明治8年 (1875) に工部省製作寮の助教兼通弁となった。ここで川上冬崖 (1827~1881) について西洋画の技法を学んだ。明治9年 (1876) に工部省製作寮が廃止となったが、東京女子師範学校の英学手伝として採用<sup>21</sup>され、後に洋画を中心とした絵画の授業も受け持つこととなった。お茶の水女子大学には《幼稚保育之図》と《幼稚保育之図(下絵)》が現存している。下絵の右下には次のように記されている。



図 11 武村耕靄《幼稚保育之図》 お茶の水女子大学蔵

此園ハ女子高等師範学校附属幼稚園ノ実況ヲ模写シテ日本美術協会秋季展覧会出品セシ モノヽ稿ナリ

時干明治廿三年九月

耕靄武村氏

よって《幼稚保育之図》は武村耕靄が明治 23 年 (1890) にその頃の東京女子高等師範学校付属幼稚園の保育状況を描いたもので、坂元彦太郎によればその年の日本美術協会秋季展覧会に出品し、間もなく高松宮家がお買上げになり、宮家に秘蔵されていたという<sup>22</sup>。お茶の水女子大学創立 80 周年記念式典にあわせ、宮家から下絵とともにお下げ渡しになりお茶の水女子大学に秘蔵されて今日に至ったものである<sup>23</sup>。

《幼稚保育之図》は170.0×81.7 cmの絹本着色で構図は四段からなるものである。第一段目は「兎と亀」の掛図を使用し「談話」を行っている。保姆は右手に指示棒を持ち、掛図を指示している。左手にみえる壁面には鶏図の掛図がある。また下絵には描かれていないが、左側に親鳥が雛に餌付けしている掛図がある。

第二段目は幼児13名、保姆2名が描かれ、それぞれフレーベル式の恩物を行っている。中

央に保姆が2名描かれているが、左側にいる保姆が鳩の標本を見せている。目の前にいる男 児が「はと」と書き「書き方」をしていることがわかる。

第三段目は幼児7名、保姆1名が描かれており、オルガンを弾いて唱歌をしている場面である。保姆の背後にある黒板には図が描かれているが、下絵を見ると何も書かれていない。 武村は黒板に見本としてどの図を描くか熟慮し図を選択したと推測される。第四段目では幼児12名、保姆1名が描かれており、戸外での遊嬉をしている場面である。

第二段目の恩物遊びでは、左手にいる女児が図画を行っており、紙の小さな手本を見ながら罫線が引かれた石盤に石筆で描いている。図画を行う際には手本を使用しており、図画は図版を手本として描き写す「臨画教育」が行われていたと推察される。ではこの手本はどこに由来するものであろうか。

## 3.3 文献に描かれた「図画」の手本

幼稚園発足にあたり欧米先進諸国の幼稚園を例としたにもかかわらず、幼稚園の実際を見聞した者は稀であった。欧米からの外国書を翻訳して参考としており、図画の手本においても同様であった。これらの原著については湯川嘉津美による『日本幼稚園成立史の研究』<sup>24</sup> に詳しい。

明治前期に刊行され図画について記述のある文献として、『子育の巻』<sup>25</sup>、『幼稚園』<sup>26</sup>、 『幼稚園記』<sup>27</sup>、『幼稚園法二十遊嬉』<sup>28</sup>、『幼稚保育編』<sup>29</sup>、『幼稚園摘葉』<sup>30</sup> が挙げられる。

日本最初の幼稚園教育書といわれるロンゲ夫妻の共著である『幼稚園』(巻上) は桑田親五によって翻訳され明治9年(1876)1月に刊行された<sup>31</sup>。その後、明治10年(1877)7月に巻中、明治11年(1878)6月に巻下が刊行された。原著はA practical guide to the English kinder-garten, (children's garden,) for the use of mothers, governesses, and infant teachers: being an exposition of

Froebel's system of infant training, accompanied by a variety of instructive and amusing games, and industrial and gymnastic exercises, also numerous songs set to music, and arranged for the exercises であり、筑波大学附属図書館には「東京女子師範学校附属幼稚園書之印章」の蔵書印のある原著が現存している。全 68 ページであり、図画は DRAWING として説明しており、図版は Plate LX から Plate LXVまで 6 ページにわたっている。桑田親五訳による『幼稚園』と比較すると文章・図版ともにほぼ同一であることがわかった。たとえば Plate LX と『幼稚園』(巻下)の十一丁右(図 12)は左右の順序が逆だが、一つ一つの図は同一である。

図画については『幼稚園』(巻下)に「圖を引く業」とありそこで触れている。「圖を引く業」として全部で13ペー

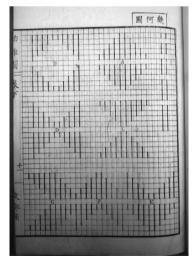


図 12 『幼稚園』十一丁右 筑波大学蔵

ジが割かれている。そのうち「幾何図」として6ページにわたって、図の基本形(縦線、横線、正方形の組み合わせ図形、曲線、斜線による組み合わせ図形)が掲載されている $^{32}$ 。「圖を引く業」は、この縦線・横線の図に付された英記号を使った線の引かせ方(幾何図法)についての詳細な解説文である。「幾何図法中の實験の道理を説き明する足るべし」 $^{33}$ とあり、幾何図法の初歩として図を引くことをおいている。『幼稚園』は個々の恩物の取り扱いについて説明しており、「幼児が楽しい経験を得て創造的な力を育むことになるというようには理解されていなかった」 $^{34}$ という。

『幼稚園』とならんで明治初期の幼稚園教育の実際に大きな影響を及ぼしたものに『幼稚園記』 $^{35}$ (巻之一から巻之三・附録)が挙げられる。これは明治  $9\sim10$  年( $1876\sim77$ )に関信三によって翻訳されたもので、原著は巻之一から巻之三まではドゥアイによる The kindergarten: a manual for the introduction of Froebel's system of primary education into public schools, and for the use of mothers and private teachers、附録はマンとピーボディによる Moral culture of infancy and kindergarten guide である。『幼稚園記』の一節 $^{36}$  によって「一定の形式を重んじる恩物中心主義の保育が、もたらされた」 $^{37}$ といわれている。

巻之三<sup>38</sup> は「圖畫課 フレベル氏ノ法制ニ係ル」<sup>39</sup> との見出しがあり、第十恩物の図画法について詳細に書かれ、他の記述はない。巻之三の巻末には16ページにわたり第一表から第十六表がある<sup>40</sup>。ただし第十一表の下部から第十六表までは補遺課としている。原著ではTable. I から Table. X VI となっており、比較してみると全く同じ図を翻刻したことがわかった。すべての図に番号が付されており1~144と補遺課1~56の計200の図がある。巻之三では図版番号1~111の直線による図形及びと143,144のピタゴラスの定理の説明が主となっており、これらは図版全体の57%にあたる。残り43%にあたる112~128の直線および曲線による図形、129~142の曲線による植物(葉)や果物、補遺課の説明はない。これは恩物がすべて幾何法に基づいており、その恩物を代表するものとして巻之三すべてに圖畫課がとりあげられていること、曲線による図形は重視されていなかったことを示している。

この時期の幼稚園は恩物中心主義であったが、恩物の中には幼児にあまり適さないと思われるものや幼児があまり好まないもの、幼児にとって難しすぎるものなどがあり、恩物の保育効果に対して疑問が生じることとなる。その結果、恩物に対する評価は次第に低くなる。明治32年(1899)の文部省令第32号「幼稚園保育及設備規定」では保育項目を遊戯・唱歌・談話・手技とし、恩物を「手技」に押し込めることとなる。明治後期に刊行された『幼稚園保育法』や『手技図形』といった図集には、幼児にとって難解な幾何図法はみられず、白紙に毛筆の手本が示され大きな変化がみられる。また「随意」という記述により、幼児の自発的な表現活動を評価する動きがみられるようになる。

#### 3. 4 日本各地の幼稚園に現存する図画教材 - 掛図-

明治期の幼稚園の図画教育では、どのような図画教材が使用されていたのだろうか。

本展覧会の浮世絵を振り返ってみると、小国政(五代歌川国政か)による《幼稚園教育遊双六》(明治 25 年・1892、図 4)では、「幼稚園単語之図」に掛図を指し示しながら教授している保姆の様子が描かれている。一つ一つの絵を示しながら、言葉を教えているようである。同じく《幼稚園教育遊双六》の「指教図」には象の絵を指し示し、「博物理解」を行っているように推察される。第 2 章でも触れている掛図が幼稚園でも使用されており、幼稚園においても一斉教授法を導入していたことが示されている。

掛図とは、学校の教室において黒板や壁面に掲げて教授の際に用いた大判の絵図や表などを指す。西洋では「ウォール・ピクチャー」とも呼ばれ 18~19 世紀には多くの地図と博物図が一制教育の授業と感覚教育の導入に使用された<sup>41</sup>。西洋の掛図が明治期に日本にも導入されそれを模倣した掛図がつくられることになるのだが、掛図は使用するたびに損傷がすすみ、たいていのものは大型であるため保管が難しく破棄されてしまったものが多い。そのため現存する掛図はそれほど多くはないが、日本各地の幼稚園にはわずかではあるが明治期の掛図が残されていることがわかった。

#### 3.5 土浦幼稚園の掛図

土浦幼稚園は明治 18 年 (1885) に土浦西小学校 (現・土浦小学校) 附属幼稚園として開園した<sup>42</sup>。当時の幼稚園は公私立合わせても全国で 30 園程度であったことを考えると初期の開設といえる。

土浦幼稚園にはフレーベルの恩物をはじめ教具、玩具、掛図、記録類など貴重な資料が残されており、現在は土浦市立博物館に寄託されている<sup>43</sup>。また土浦幼稚園には幼稚園用の貴重

現存している。

土浦幼稚園には東京造画館が明治期に発行した《幼稚園手技掛図》が 11 枚現存している。これらは 76.2×54.2 cmの大型の掛図であり土浦幼稚園にのみ現存している貴重な掛図である。カラー印刷の紙が貼付されており厚手の掛図となっている。手技が片面に 2~3 個描かれており、図画は《幼稚園手技掛図 箸環画キ方》および《幼稚園手技掛図 箸環 剪紙 画キ方》(図 13) に掲載されている。

な掛図があり、図画に使用されたと推測される掛図も

《幼稚園手技掛図 箸環 剪紙 画キ方》の掛図の「画キ方」には縦横の罫線を利用した「家」「舟」が描かれており左上に「鷹」が描かれている。白紙部分には「山」「杖」「池」「火箸」「梯子」「門」「卵」「電信柱」「魚」「日ノ丸」「トンボ」「紋形」「踏台」「汽車」「栗」

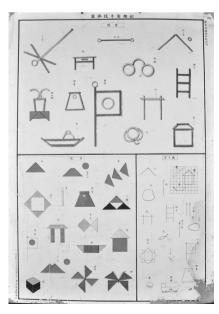


図 13 《幼稚園手技掛図 箸環 剪紙 画キ方》土浦博物館蔵

があり、合わせて18点がペンで描かれている。いずれも幼児にとって身近な題材である。

同じ面に描かれている「箸環」および「剪紙」の図と比較すると、題材名は異なるが「画キ方」の「日ノ丸」と「剪紙」の「国旗」、「箸環」の「国旗」の図形の構造がほとんど同様であることが確認できた。また「画キ方」の「山」と「剪紙」の「山」の図形の構造はほぼ同じであり、「箸環」の「山ニ月」は「画キ方」の「山」に丸い小さな月を追加した図形となっている。このように同じ面の図を見ていくと、「画キ方」の「踏基」「トンボ」「門」「梯子」「舟」「家」「紋形」もそれぞれ構造が似ていたり、ほぼ同じ図形であったりする。よって《幼稚園手技掛図》では、「画キ方」は同じ面に描かれた他の手技「箸環」「剪紙」と連携を図っていたことがわかった。

## 3.6 舞鶴幼稚園の掛図・絵画

明治 17 年 (1884)、舞鶴幼稚園は明倫小学校内に幼稚保育科として設置された。全国で 10 番目、京都府では 2 番目の設立であった。

明治33年(1900)、小学校令施行規則に基づき保育要項を定めることになる。保育科目は遊戯、唱歌、談話、手技となるが、明治37年(1904)に保育要旨を改め会集、修身、庶物、板排へ、箸排へ、環排へ、豆細工、紙折、摺紙、繋キ方、石盤、遊戯、唱歌、積木等となる。よって図画は「石盤」であったと推測されるが、舞鶴幼稚園の石盤や石筆は発見されていない。舞鶴幼稚園の調査では明治期の保育記録や描画作品が発見されていないため、舞鶴幼稚園の図画教育の詳細は明らかではない。

舞鶴幼稚園史である『百年のあゆみ』44によれば明治35年(1902)に参考図書、庶物標本

を備え付ける<sup>45</sup>としており、それらが図画に使用されていた可能性があるが、これまでの調査では参考図書および標本は発見できていない<sup>46</sup>。しかし舞鶴幼稚園では肉筆の掛図が見つかっており図画に使用された可能性がある。

他にも動物を描いた肉筆の絵画が 8 点現存しており、描かれている動物は雄鶏、狼、猿、駝鳥、虎、キジ、白い鳩と灰色の鳩、ライオンとねずみである。これらのうち《ライオンとねずみ》(図 14) および《鳩図》を描いた作者が藤山鶴城(藤山復雄)であることを確認した。

《ライオンとねずみ》および《鳩図》を描いた藤山 鶴城(藤山復雄)は明治3年(1870)に旧田辺藩士族 として舞鶴町に生まれた。幸野楳嶺、野村文挙に師事 し、明治25年(1892)京都画学校を卒業し日本美術協



図 14 藤山鶴城(復雄)《ライオンと ねずみ》舞鶴幼稚園蔵

会会員として活躍した<sup>47</sup>。舞鶴市にある妙法寺の障壁画《鷹図・牡丹孔雀図》<sup>48</sup>、桂林寺の襖 絵も描いている。舞鶴幼稚園に現存する動物絵画は表装されておらず周囲に損傷があるため、 保育室に展示されて図画に使用されていた可能性もある。

## 4. おわりに

以上、第2章の展覧会報告では、明治期の子ども絵に学校教育や洋装などの新しい文化、 富国強兵の流れを受けた戦争ごっこが反映されており、近代の子ども史を考察する上での有 効な資料となることを示した。また第3章の講演会内容では、様々な図版から明治期の幼稚 園の位置づけや掛図を使った図画教育の様子を読み取っていった。加えて日本各地の幼稚園 の一次史料調査によって、一部の幼稚園ではあるが地域の日本画家と幼稚園のかかわりが示 され、幼稚園で本物の日本画に触れていた可能性が示唆された。

明治の教育、遊び、風俗を紹介した本展覧会では、おもちゃ絵の体験コーナーも設けて、 来館者にとって親しみやすい構成を心がけた。また、福祉総合学部・子ども福祉コースの学 生が受講する授業「保育の表現技術(造形)」では、学芸員の解説付きの見学会を行い、幼稚 園の歴史や子どもの伝承遊びについて学びを深めることができた。

本展覧会・講演会は、維新前から続くものや新しく導入された教育や風俗など、明治期の子どもを取り巻く文化を、本学学生をはじめ、学外の来館者、聴講者に、視覚的にわかりやすく紹介する機会となったと考える。

# [注]

- 1 天野郁夫(1997)『教育と近代化―日本の経験』15 玉川大学出版部
- <sup>2</sup> 明治8年(1875)には全国の小学校2万4000余校のうち、新築校舎は18%で、寺院40%、民家33%と既存の建物が利用されていた。

長島保 (1996) 『写真・絵画集成 日本の子どもたち 近現代を生きる 1 明治から大正・昭和へ』20 日本図書センター

- 3 掛図について、以下の文献を参照した。
  - 玉川大学教育博物館(2006)『掛図にみる教育の歴史』
  - 玉川大学教育博物館(2008)『学びの風景―明治のおもちゃ絵・絵双六に描かれた教育』
- 4 文部省の掛図の「莞(い)」が、《児学教導単語之図 第一単語図》では「慈姑(くわい)」になっている。また、文部省の掛図には説明文はない。
- 5 玉川大学教育博物館(2008)前掲書:36
- 6 唐澤富太郎(1968)『図説 明治百年の児童史〈下〉』90-92 講談社
- <sup>7</sup> 玉川大学教育博物館(2008)前掲書:42
- \* 遊びの名称や方法について、以下の文献を参照した。 笠間良彦 (2005)『日本こどものあそび大図鑑』遊子館 中田幸平 (2009)『江戸の子供遊び辞典』八坂書房
- 9 清田治 (2010)「渥美半島の生んだ挿絵画家 宮川春汀の生涯~その活躍期を中心として~」『挿絵画家 宮川春汀展』102-111 田原市博物館
- 10 甘露純規(2013)「少年はなお夢に戦う―日清戦争ごっこ試論」酒井敏編『中京大学文化科学叢書 第14 輯 子どもと〈遊び〉』23-64 勁草書房
- 11 三友晶子 (2009)「裁縫雛形にみる子供服の洋装化の過程」『東京家政大学博物館紀要』14:167-185

- 12 田辺真弓 (2010)「近代の衣服―洋風化の時代」増田美子編『日本衣服史』285-347 吉川弘文館
- 13 ジョージナ・オハラ、深井晃子訳 (1988)『ファッション事典』107 平凡社
- 14 阿部猛 (2007) 『起源の日本史・近現代篇』 6 同成社
- 15 田辺真弓、前掲書
- 16 橋本澄子 (1998) 『日本の髪形と髪飾りの歴史』95 源流社
- 17 日本保育学会 (1968) 『日本幼児保育史 第一巻』 44-49 フレーベル館
- 18 文部省 (1979) 『幼稚園百年史』 500 ひかりのくに
- 19 日本保育学会,前掲書:69 に玩具について「一立方形小片木幾百箇 家屋城楼等ヲ模造シ発オヲ試ルノ具トス」とありフレーベルの恩物の影響がみられる。
- 20 武村忠編(1931)『耕靄集 下』武村忠
- <sup>21</sup> 同, p.27 にある明治 9 (1876) 年 4 月 7 日の目記に記されている。
- <sup>22</sup> 勝部真長 (1977)「閨秀画家 武村耕靄女史」『幼児の教育』第 76 巻第 5 号: 25-27 日本幼稚園協会
- 23 お茶の水女子大学 (2005)『創立百三十周年記念展図録』6 国立大学法人お茶の水女子大学
- 24 湯川嘉津美(2001)『日本幼稚園成立史の研究』風間書房
- 25 近藤真琴(1875)『博覧会見聞録別記 子育の巻』博覧会事務局
- <sup>26</sup> ロンゲ夫妻 (Ronge, J. and B.) 共著、桑田親五訳 (1876-1878)『幼稚園』巻上・巻中・巻下 文部省
- 27 ドゥアイ著、関信三譯述 (1876-1877)『幼稚園記』巻之一・巻之二・巻之三・附録
- 28 関信三(1879)『幼稚園法二十遊嬉』青山堂
- 29 林吾一 (1879) 『幼稚保育編』 金港堂
- 30 中村五六 (1893) 『幼稚園摘葉』普及社
- 31 岡田正章 (1963)「明治初期の幼稚園論についての研究 (その1)」『東京都立大学人文学報』31:77 には「この書はフレーベルの精神をもって家庭教育と保育を改革しようとすることを明らかにしていたにもかかわらず、翻訳書ではそういった趣旨をすべて省略していた」と述べられている。
- 32 ロンゲ夫妻共著、桑田親吾訳 (1977)「幼稚園」『明治保育文獻集』第1巻:315-320日本らいぶらり (以下、「幼稚園」の引用は同書による)
- <sup>33</sup> 同:326-327
- 34 日本保育学会、前掲書:82
- 35 ドゥアイ著、前掲書
- 36 『幼稚園記』では恩物の扱いについて「幼稚園ニ於テ児戯ノ本状ヲ存シ且ツ園課ノ高度ヲ占ルモノハ玩戯ノ一課ナリ 而シテフベル氏ノ法制ヲ固守シ果シテ其順序ヲ錯ラザルトキハ此玩戯課タルヤ自ラ智力ノ増進ヲ助クヘキヲ以テ人生勉強ノ開手トスルノ最良方法ナリ」としている
- 37 日本保育学会、前掲書:85
- 38 倉橋惣三・新庄よし子共著(1956)『日本幼稚園史』フレーベル館:75 には東京女子師範学校附属 幼稚園の保育用圖畫器具表が掲載されており、「畫き方の部」において『幼稚園下の巻』が挙げられ ている。
- 39 ドゥアイ著、前掲書:177
  - またこの見出しを原本での見出しと対照させると The Play of Drawing according to Froebel's System であることが『明治保育文獻集別巻』(1977) 日本らいぶらり:38 に掲載されている。
- <sup>40</sup> ドゥアイ著、前掲書:233-248
- 41 石附実(1986)『教育博物館と明治の子ども』130 福村出版
- <sup>42</sup> 土浦幼稚園設立の経緯については是澤博昭による「簡易幼稚園の設立経緯とその実像 土浦幼稚園とその時代- 」(『土浦市立博物館第20回特別展 幼稚園誕生』1998)に詳しい。
- 43 土浦市立博物館に寄託されている資料については『土浦市史資料目録:17, 土浦の古文書 土浦市右 籾 宮本家文書: 土浦市立土浦幼稚園所蔵資料』(2007、土浦市古文書研究会編) に掲載されている。
- 44 舞鶴幼稚園創立百周年記念事業実行委員会記念誌部 (1984)『百年のあゆみ』舞鶴幼稚園創立百周年 記念事業実行委員会
- 45 同上:19
- 46 舞鶴幼稚園の一次史料調査において掛図以外に積木などの恩物を確認した。
- 47 舞鶴市史編さん委員会編(1988)『舞鶴市史 現代編』1073 舞鶴市
- 48 若杉準治監修(1983)『文化財丹後の錦 拾遺』30 京都府
- <付記>挿図3~5は、玉川大学教育博物館『学びの風景―明治のおもちゃ絵・絵双六に描かれた教育』 (2008年)より、挿図9は本展覧会ちらし裏面より転載しました。

# Art Exhibition and Lecture Report: "Children living in the Meiji Era – Play and education in woodblock prints"

# Yuri Makino, Mariko Yamaguchi

#### **Abstract**

This paper provides a review of the art exhibition "Children living in the Meiji Era - Play and Education in Woodblock Prints," which was held at the Mizuta Museum of Art at Josai International University from November through December 2013, as well as a research of the related lecture by Yuri Makino, "The Kindergarten of the Meiji Era: Teaching the Art of Drawing using Wall Pictures and other Educational Materials". The exhibition displayed woodblock prints of children in the Meiji Era, which depicted the education, play and customs of the time. In her lecture Makino also introduced the history of kindergartens and teaching the art of drawing in Japan and referred to her research on historical materials from Tsuchiura Kindergarten and Maizuru Kindergarten. The exhibition and lecture offered our students and visitors an opportunity to get acquainted, in a visually understandable way, with the culture surrounding children before and during the Meiji Era. Additionally, educational ideas and customs imported from Europe and the United States following the Meiji Restoration were examined.